

完璧彼氏と完璧な恋の進め方

目次

完璧彼氏と完璧な恋の進め方

5

完璧彼女になる方法

243

完璧彼氏と完璧な恋の進め方

夜の喫茶店には仕事帰りのサラリーマンが大勢いて、どこかのんびりとした雰囲気を感じた。そのなかで、神妙な顔をしたわたしと三人は、やけに奇妙に見えることだろう。

季節は冬。つい先週バレンタインデーを終えたばかりのこの時期に、わたし、池澤史香は二十七歳にして人生四度目の失恋をしようとしていた。

「……え？ どういうこと？」

「だから、彼女に子どもができたんだ。結婚して責任を取ろうと思う」

わたしの彼氏である森さんの声がやけに大きく響き、一瞬その場が水を打ったように静かになった。けれどそれは本当に一瞬で、すぐにざわめきが戻ってくる。

森さんとわたしは、食品会社、サクラ屋フーズで同じ研究室に勤務している。彼から告白され、約十か月つきあってきた。そろそろ両方の親に挨拶を……なんてことを言われたのはつい最近のことだ。それなのに、子ども……？

彼の隣には、少し俯いて座っている女の子がいる。よく見れば、同じ会社の受付の子じゃないか。確か去年入社のはず。かわいい子だから、ちよつと話題になっていた。名前は知らないけど。

「結婚って……」

思わずつぶやいたとき、その彼女がわつと声を上げてテーブルに突っ伏した。

「ごめんなさい、池澤さん。わたし、大介さんが好きなんです。お願いします。別れて下さい」「えっ、ちよつ」

彼女の泣き声が店内に響いた。またも静寂がおとずれる。だけどさつきと違うのは、ざわめきが戻らなかったことだ。それどころか、いくつもの視線が向けられるのを感じた。

勘弁してよ、まるでわたしが泣かせたみたいじゃない。

「由奈、あんまり興奮するなよ。お腹に障るぞ」

森さんが宥めるように彼女の背中を撫でる。

「大介さん」

うつとりと見つめあう二人を茫然と見ながら、わたしは自分の男運の悪さを改めて実感していた。自分で言うのもただけけど、わたしは男運が悪い。それはもう、びつくりするくらいに。だけど今回のことで、これはもはや運じゃなくて、自分の問題ではないかと思ってしまった。

——初めて彼氏ができたのは、高校生のときだ。同じクラスのちよつといけてるグループの男の子に、ある日突然告白をされたのだ。昔から勉強ばかりで冴えなかったわたしは、初めての告白に舞い上がった。彼のことを前からいいなと思っていただけもあり、なにも考えずに頷いたのだ。

ふわふわした足取りで一緒に下校して、また明日ねって約束して……。その日は眠れないくらい興奮した。でも翌朝登校したら、その子に謝られた。

「ごめんね、あれ冗談なんだ」

言葉の意味が理解できなかつた経験は、あれが初めてだった。

なんとか理解しようとして改めて聞けば、くそがつくほど真面目だったわたしをからかっただけ、なんだそう。まさに一夜にして天から地へ叩き落とされたわたしは、そのあと彼に対して何事もなかったように振舞うだけで精一杯だった。それが、最初の失恋の話だ。まあ、あれを彼氏とカウントしていいのか甚だ疑問だけれど、あえて入れておこう。

ちなみにその後、なぜかわたしが彼に失恋したことになつてた。まったく本意極まりない。次に彼氏ができたのは、大学に入つてからだ。彼は違う学部先輩で、華やかなテニスサークルの部長をしていた。大学生になつてもくそ真面目を通してわたしに興味を持つたらしく、結構真剣な調子で告白されたのだ。高校時代の嫌な思い出が蘇つたけれど、彼の「真面目な子が本当は好きなのに、今の自分には華やかな美人ばかりが寄ってきていやなんだ。君のような地味で冴えない子がいいんだ」と微妙すぎるけれど正直なセリフに、ついつい受けてしまった。けれどそれが運のつき。

遊び慣れた彼は、わたしを流行りの場所へ連れだしてくれた。なにもかもが初めての経験で、とても楽しい日々だった。そして二か月後――。根っからの遊び人だった彼は、他の女の子とも遊びだした。いわゆる浮気だ。最初のころは黙つて泣いて、彼を問い詰めることすらできなかった。けれど、だんだんどうでもよくなつた。五人目の浮気がわかつた時点でわたしは別れを決意し、彼を呼びだした。そこで初めて彼を責めたら――

「俺、そういうの面倒なんだわ。別れよ」
なんて、彼の方から別れを告げられた。

なんで逆ギレ？ こっちが振る予定だったのに、振られたようになった事実が忌々しい。

大学を卒業するまで、わたしには、その彼に振られた女という代名詞がついていた。

三番目の彼とは、就職してすぐのころに出会つた。彼は、わたしがよく行くカフェの店員さんだった。高校時代の彼のような子どもっぽさもなく、二人目の彼のような軽さもない。真面目で明るい笑顔で接客をする姿に、わたしは好感を持っていた。だから、その彼から告白されたときには、驚いたけれど、とてもうれしかった。それに今度こそという思いも、もちろんあった。

つきあいはじめても、お互いに仕事が忙しかったから、会える時間は少なかった。
――だから、見抜けなかつたんだろう。

最初に疑問を持ったのは、彼がデートのたびに「お金がない」と言う点だった。

わたしだって社会人だ。年上とはいえ、男性がすべての支払いをすべきと思つていただけではない。でも、レストランでの食事代やカフェのお茶代など、毎回支払いのたびにそう言われると不信感を抱く。

綻びは、あつという間にその範囲を広げていった。そしてあるお休みの日。わたしは駅前のパチンコ屋からでてくる彼を偶然見かけた。その姿は、いつもわたしが見ている好青年の彼とは程遠かつた。

後日、彼の鞆のなかに何枚もの競馬の馬券を見つけた。挙句の果ては、彼の部屋で見た消費者金

融からの督促のはがきだ。

つまり、真面目な好青年だと思っていた彼は、ギャンブル好きで借金まみれの男だったのだ。こんな男とつきあってなんかいられない。わたしは、この三人目の彼氏と別れることを決めた。けどまったく腹が立つことに、この彼にも、わたしから別れを告げる前に向こうから言われてしまったのだ。

「彼氏が困ってるのに助けてもくれないんだ？ そんな冷たい女だとは思わなかったよ」

最後に捨てゼリフのようにそう言われた。

そのあと、彼は借金取りに追われ、どこかに失踪したらしい。結局ろくでもない男だったので、別れたことにまったく後悔はない。けれど、最終的にここでも振られたことになっているのが不本意だ。

男はもうこりごりだ。このとき、わたしは心の底から思った。

けれど——恋愛に関しての学習能力がないわたしは、また失敗してしまったのだ。

わたしの職場に森さんが配属になったのは、去年の春のこと。

菓子会社に勤めているが、わたしは直接商品を作ったりはしていない。成分の分析データをだすことが仕事だ。お菓子にどんな成分がどれくらい含まれているか。それを調べている。白衣を着て、朝から晩まで試薬品やパソコンにとらめつこをする生活。一日中誰とも口も利かない日もあるくらいだ。

そんな静かな職場に、支社から森さんが異動してきた。彼はいわゆるイケメンで、驚くほど明る

い人だった。

その日以降、研究室にはいつも彼の明るい声と笑い声が聞こえるようになった。それを邪魔だと感じる先輩もいたみたいだけれど、わたしには好ましく思えた。

一緒に仕事をするようになつてすぐ、わたしは森さんから告白をされた。でもこれまで散々な恋愛をしてきたから、最初は断った。いくら明るく爽やかなところに好感を持っているとはいえ、あくまでそれは同僚としてのこと。つきあうなんて考えてもいなかったからだ。

でも何度断つても森さんはめげずにわたしをデートに誘い、そして何度も告白をしてくれた。

はつきり言って、これで断れる女子はいないと思う。結局、わたしは森さんにつきあうことにしたのだ。そのあとの約十か月、わたしたちはごく普通のカップルとして、それなりに楽しく過ごしてきた。

とはいえ仕事は忙しく、そんなに頻繁にデートはできなかった。それに職場にはつきあっていることを内緒にしていたから、毎日研究室でこっそりと目を合わせて、ドキドキを楽しむ日々。

「もうすぐ出会って一年になるし、そろそろ親に挨拶に行こうか」なんて話がでたのも、自然な流れだった。だから、わたしもやっと人並みに幸せになれるんだって、そう思っていたのに——

まさか、ここにきてこんな展開になるとは。

今思い返しても、森さんに不自然なところなんてなかった。毎日顔を合わせていたし、電話もメールもしてた。約束をドタキャンされたこともなければ、社内での彼女と一緒にいるところも見たことがない。まあ、一日中研究室に閉じこもっていたから、ドアの外のことにはなにも知らない

のだけれど——、それでも、浮気の気配すら感じたことがなかった。

おまけに先週のパレンタインにわたしからチョコレートを渡し、森さんも「ホワイトデーは楽しみにしてて」なんて言ったのだ。

なのに、妊娠？ 結婚？ わたしではなく、その子と？ いつから？ どうして？

まだ理由すら聞いてない。

はっと我に返ると、わたしの前には誰も座っていないかった。

「……え？」

思わずつぶやいた声が、ざわめきにかき消される。

誰もいないそこには、飲み終えたコーヒーカーップがふたつと伝票が残されていた。

「長い回想をしてたわたしも悪いけど、こういうときって、せめて支払ってくれるもんじゃないの？」
もうわたしになんてまったく興味ないよって感じの森さんを思いだす。昨日までの態度が嘘みだ。
いだ。

「謝ってもくれなかったな……」

一度も彼から謝罪の言葉がなかったことを思いだした。一年近くつきあってきて、昨日まで普通に仲がよかつたはずなのに。こんな風にあっけなく終わってしまったことがまだ信じられない。

テーブルの上をじっと見つめていたら、目がしばしばしてきた。泣きそうなのか、始めて三か月になるのにいまだに慣れないコンタクトレンズのせいなのか、わからない。

わたしは小さなころからずっと、メガネをかけていた。だけどそんなわたしに、森さんはコンタクトを勧めたのだ。
「ドレスを着るには、メガネじゃない方がいいんじゃない？」
って。まるで結婚を示唆するような言葉にドキドキして、すぐにコンタクトレンズを作った自分がバカみたいだ。しかも、使い捨てのソフトレンズが主流のこの時代に、極度の近視と乱視のせいで、まさかのハードレンズになった。そうしてまで使ったコンタクトにはまったく慣れない——。色々考えていたら、本当に涙がでてきた。白い伝票がぼやけてにじむ。
何度も瞬きをしていたら、コンタクトがずれたのか微かな痛みが走った。それがまた涙を誘発して、瞬きの回数を増やす悪循環だ。

痛いし悲しいし情けないし、散々な気分だ。もう早く帰ろう。

伝票を掴み、勢いよく立ち上がる。よくよく考えれば、こんな人の多い場所で修羅場になったなんて、恥ずかしいことこの上ない。救いなのは、ここが会社からかなり離れていることだ。知り合いに見られた、なんてことはないだろう。森さんもその辺りは気にしたのだろうか。

それでも、なるべく周りを見ないようにしながら、さっさとレジに向かおうとした。歩き出したそのとき、ドンという衝撃とともに鼻に痛みを感じた。

「あだっ」

女の子らしきとは程遠い声ができる。涙でにじむ目と鼻を手で押さえると、大きな影が目前にあることに気づいた。

「大丈夫ですか？」

低く、優しい声が入る。頭の上から響く。どうやら勢い余ってぶつかってしまったらしい。

「だ、大丈夫です。すみません」

相変わらずコンタクトが痛くて、涙で濡れた視界にはぼんやりとした人影しかない。声の感じと雰囲気から若い男性だと推測はできたけど、顔などはまったくわからなかった。

「本当にごめんなさい」

もう一度頭を下げ、その人の横をすり抜ける。なんとか目を凝らしてレジを見つけ、三人分のコーヒーの会計をしてさっさと店をでた。

瞬きを何度もして、涙を振り払う。ひんやりとした空気が目にしみた。

早く帰ろう。そして、この煩わしいコンタクトを外し、思いっきり泣こう。でもって明日、森さんに二人のコーヒー代を請求してやる！

2

翌朝、自宅の洗面所の鏡に映ったわたしの顔は、いつもとあまり変わりなかった。泣き過ぎて腫れてしまうと思っていた目は、それほどでもない。

「意外と丈夫なのね、わたしって」

まあ、あからさまな泣き顔で入社するのもなんとなく負けた気がするから、これでよかったのだ

ろう。

昨夜は帰宅してから、自分の部屋で散々泣いた。十か月とはいえ、これまでの誰より長くつきあつた人だ。恋人同士だったときのことを思い返してみても、楽しいことばかりだった。

失恋なんて誰にでもあることだ。それはわかっている。ただ、こんな終わり方は想像すらしていなかった。

気持ちが悪く昇華できない。もしかしたら夢なのでは？ なんて、思ってしまうくらいだ。好きだった気持ちを突然断ち切られて、どう考えていいのかもわからない。

そして、悲しいと同時に、腹が立って仕方がない。

わたしとつきあいながら、別の女性と子どもができるようなことをしていたなんて。

「……いやちよつと待って。彼女に子どもができたから結婚ってことは……わたしのほうが浮気相手なんじゃ？」

そんな考えに至って、さらに落ち込んでしまった。

昨日森さんから伝えられたことは、彼女に赤ちゃんができたから結婚するということだけ。二股をかけていた理由も言い訳も、なにも言われなかった。どうせなら、嘘でもわたしのことを嫌になつたって言うてくれたらよかつたのに。

「でももう終わったんだから、忘れるしかないのよ」

鏡のなかで百面相をしながら、自分に言い聞かせるようにつぶやく。どれだけ泣いてもすがつても、現実はなにも変わらないのだから——そんな風に考えたら、また涙がにじんできた。

幸いなことに、今家にはだれもいないから、人に見られる心配はない。

同居の両親はまだまだ現役で働いていて、出勤時間もわたしより早いのだ。去年までは弟と一緒に住んでいたのだけれど、彼は就職を機に一人暮らしを始めたから、今わたしはこの家で両親と三人暮らしだ。

実家からでようと思ったことは何度もあったけれど、結局仕事が忙しくて行動には移せずにいた。毎日帰って寝るだけだし……と甘えた考えに収まっているということも否定はしない。

いい歳をして、失恋して泣いたことを親に気づかれなくてよかったと思いつつ、何度も冷たい水で目のまわりを冷やした。

いつも通りに家をでて、会社に向かう。大勢の社員にまじって建物に入ると、これまで特別意識したことがなかった受付カウンターに目を向けた。そこにはまだ誰もいなくて、内心ホッとす。研究室のあるフロアへ向かいながら、徐々に心臓の鼓動が大きくなるのを感じていた。わたしはいつたい、どんな顔で森さんに会えばいいのだろう。

昨日のコーヒートのレシートは持ってきている。お金払ってよ、と言うつもりだったけれど、そんなことをしたら、ますます自分が惨めになるだろうか。

更衣室のロッカーに荷物を仕舞い、白衣に着替える。社員証を首から下げ、研究室に続くドアのロックを解除してなかに入った。職務の特質上、ここは他のフロアに比べて特にセキュリティが厳しい。

足を踏み入れると、いつもはシーンと静まっているはずのそこが、今日はやけに賑やかだった。その中心から聞こえる声に、治まっていた心臓の鼓動がまた大きくなった。

「結婚が決まったって？ おめでどう、森くん」

「ありがとうございます」

「式にはぜひ呼んでくれよ」

「もちろんですよ、所長」

そこには、所長や同僚に囲まれ、満面の笑みを浮かべている森さんがいた。

「おはようございます」

そう声をかけると、みんなが振り返った。

「おお、おはよう、池澤くん。君は知ってるかい？ 森くんが結婚するんだよ」

所長が機嫌よく言う。その向こうに、少しだけ顔をこわばらせた森さんが見えた。

「そうなんですか。おめでどうございます」

曖昧に言葉を返し、なんとか自分の席に向かった。

「それにしても、相手は受付の由奈ちゃんか。シヨック受ける野郎も多いだろう」

「いや、森が毎日せつせと受付に通ってたのはみんな知っていたんだから、驚かないさ」

「驚いたのは、彼女がおめでたってことだけだな」

「……なんだって？ みんな知ってた？ 毎日せつせと受付に通ってた？ わたしと内緒の社内恋愛をしていたんじゃないの？」

思わずバツと振り返ったけれど、気づかないのかわぎとなのか、彼はこつちをちらりとも見ない。「いつから由奈ちゃんときあつてたんだよ?」

「去年のクリスマスからかな」

さらりと言った森さんの答えに、口があんぐりと開いた。

クリスマス……。去年のクリスマス、わたしと二人で過ごしたじゃない。ほら、ディナーデートだったし、プレゼントだって……。いや待てよ。あれは確かクリスマスイブだ。二十五日は仕事があつて会えないって言われたんだ。

つまり、イブにわたしと会って、翌日に由奈ちゃんときあい始めたつてこと?

森大介、なんて恐ろしい男……

地団駄を踏みたくなるのをぐつと我慢して、手が早いだんだと盛り上がる男たちを横目に、仕事の準備を始めた。

わたしが能天気恋愛を楽しんでいた間、森さんはどれだけの嘘を重ねてきたのだろう。まんまと騙されているわたしを、どんな目で見ていたのだろう。

なんだかものすごくむかつくし、同時になにかもがばかしくなってきた。

今となつては、二人のことを職場で内緒にしている本当によかつたと思わざるをえない。これのみんなに知られていたら、恥ずかしくて出社もできなかつただろう。

だから、これでよかつたんだ。そう自分に言い聞かせたけれど、やっぱり腹が立つものは腹が立つ。心のなかで罵るくらいはいいだろう。

コーヒー代くらい払え、ケチ野郎!

その日はなるべく外野の声を耳に入れないようにしたためか、普段よりも集中することができた。おかげで、仕事がサクサク進んだ。

「頑張ってるね、池澤くん」

今日の分の実験をすべて終えて報告書を書いていたら、所長に声をかけられた。

「はい、ありがとうございます」

——だって、仕事で気を紛らわすしかないんだもん。

「今日は調子がよさそうだから、これも頼むよ」

そう言つて、所長から書類の束を渡された。

「……これは?」

「森くんの担当なんだけどね、彼女がつわりで休んでいるらしいから、早く帰らせてやろうと思つて」

いい上司だろ? なんて笑っているけど、今思いつきわたしの地雷を踏みましたからね!

「明日の午前中まででいいから、よろしくね」

戻っていく所長の背中を一度睨みつけてから、書類をめくった。終わった実験のデータをまとめだけの簡単なものだ。が、森さんの仕事だと思つとムカついてくる。明日でもいいと言われたけれど、腹が立つから絶対今日中に終わらせてやる。

——なんて、意気込んで取りかかったのはいいけれど。なんだか、だんだん嫌になってきた。実のところ、森さんの仕事を手伝ったことは今が初めてではない。つきあっているときから、時々内緒で手伝っていたのだ。

夜ご飯を一緒に食べたいからってときもあつたけれど、彼から「ちよつと用があつて……」と言って頼まれてのこともあつた。今思えば、もしかしたらあれは由奈ちゃんにデートするためだったのかもしれない。

いいように利用されていた自分が情けないし、腹が立つ。

彼とつきあっている間も、実は内心、それはどうなの？ って思うことがたびたびあつた。でも、わたしはそれを我慢してきた。嫌われたくなかつたからだ。自分の過去が過去なだけに、今度こそって思いも強かつたんだと思う。だから、あえて見ないふりをしてきた。

だけど、その結果がこれだ。こんな思いをしてまで、男性とつきあう意味なんてあるんだろうか。いやそれ以前に、わたしが男の人とつきあうことに向いていないのかもしれない。

そんなことを考えながら、せつせとデータ入力をしていると、終業時間をとくに過ぎていた。研究室にはわたし以外誰もいない。

すべてを終えたときには、二十時を回っていた。思いっきり肩が凝っている。おまけに画面を見過ぎて、目がしょぼしょぼする。何度も瞬きをしていたら、コンタクトレンズが外れそうになった。

「あーあ、疲れた」

ぐるりと首を回し、でき上がったデータを所長の机の上に置く。

ロッカーの鞆かばんからスマホを取り出すと、着信が一件あつた。もしかして森さんだろうか、一瞬だけドキツとする。

画面をタップして表示された名前に、肩の力が抜けた。そこにあつたのは、竹本里沙たけもとりさ。高校生のころからの友人の名前だつた。

コートを着て、更衣室をでる。もう遅い時間だけど、社内にはまだ電気がついている部署がたくさんあつた。特に営業や開発部は、連日かなり忙しそうだ。

正面玄関には昼間の受付嬢に代わり、守衛さんが立っていた。

駅までの道を歩きながら、里沙に電話をかける。

『史香？ 今どこにいるの？』

何回目かのコールのあとに聞こえた声は、やけに楽しげだ。

「どこって会社の前だけど。今まで残業してた」

『また残業？ どうせ森に頼まれたんでしょう』

途端に機嫌の悪い声に変わる。里沙は前から森さんを気に入っておらず、わたしに対してもその感情を隠さなかつた。

「……まあ、そんなような違うような」

森さんの仕事だけど、彼から頼まれたわけじゃない。歯切れの悪いわたしの返事に、里沙が食いついた。

『なによ？ ……なんかあつたの？』

つきあいの長い里沙に、隠し事はできない。

「実はね……」

駅に向かつて歩きながら、昨日の出来事を話した。森さんが二股した挙句、浮気相手に子どもができて結婚することになったからわたしと別れた、という、まとめてみれば身も蓋もない内容だ。

『あの男っ。やっぱりどこか胡散臭いと思ってたのよ』

そう言われ、改めて自分の見る目のなさに愕然とした。それと同時に、やはりわたしにもなにか問題があるのではないかと思う。

つまり、考えたくないけれど、森さんを浮気に走らせてしまったなにかが、わたしに――

それを里沙に言ったら、鼻で笑われた。

『史香は悪くないわよ。ただ、運が本当にないだけ。ああ、逆に変な男ばかり引き寄せる運があるのかも』

なるほど、変な男を引き寄せる運か……里沙の的を射た答えに妙に感心しつつも、今度こそ完璧に落ち込んだ。

神様、そんなのいらなから、普通の恋愛をさせてくださいっ。

「もう男はこりごりよ」

『……知ってる？ あんた毎回そう言ってるわよ』

「知ってるわよ。でも言いたいのに」

はーっと白い息を吐く。それが冷たい空気にまじって消えていく様子をジッと見つめた。少しだ

け、目の奥がチクチクする。知らぬ間に涙がにじんで、目にしみる。いつまでも慣れないコンタクトのせいだけじゃない。忘れていた胸の痛みがまた戻ってきたようだ。今夜もわたしは泣くんだらうか。泣く価値もない男だとわかっているのに、その男のことを想って。

『ちようどゴハンに誘おうと思ってる電話したのよ。飲んで憂さ晴らししようよ』

「今日はまだ平日よ？」

『関係ないわよ。こんなときは飲まないよ』

一人で泣かなくてもいいんだ。そう思ったら心が軽くなった。さすがは親友。わたしのことをよくわかってる。そういえば、これまでの三度の失恋も、こんな風に里沙に頼って乗り越えてきた。四度目になる今夜も、同じように過ごせるだろう。

「おごつてくれる？」

『……一杯までなら』

「もう駅だから、すぐに行けるわ」

待ち合わせ場所を確認して電話を切った。駅の階段を下りながら、足取りが少し軽くなっていることに気づく。

待ち合わせの場所に行くと、すでに里沙がいた。里沙は背が高くボーイッシュなタイプで、人目を惹く美人だ。昔からスポーツ少女だった里沙は、今でも趣味でバスケットをしている。活動的な彼女は、ずっと勉強ばかりしてたわたしとはまったくの正反対なキャラクターだ。けれどなぜか気が合い、何年も親友を続けている。

「おまたせ」

手を上げると、里沙がわたしの顔をまじまじと見た。

「なによ？」

「いや。思ったより憔悴しやうすいしてないなと思って」

「落ち込み続けるには、いろいろあり過ぎて……」

「なによそれ？」

「飲みながら話す」

ふーんと頷いた里沙と一緒に、なじみの居酒屋に入った。平日だけど、結構混んでいる。テーブル席に向かい合って座り、一杯目のお酒と料理を頼んだ。

おしぼりで手を拭きながら、わたしはこちらを見つめている里沙を見返す。

「おもしろがってる？」

「まさか。それより早く話さないよ」

絶対におもしろがってるなと思いつつ、森さんの話をした。

「はー……知らぬはあんただけ、ってことだったのねえ」

呆あきれたような、今にも笑いだしそうな顔をする里沙。

「笑わないですよ。こっちは傷ついてるんだから」

「笑ってないわよ。どっちかというところ怒ってるわよ、もちろん」

「なんでわたしも気がつかなかったのかなあ」

運ばれてきたお酒を呷あおり、大きいため息をついた。口にだせば、後悔のような怒りのような、複雑な感情がわいてくる。

「あいつがうまくやってたんでしょ。史香はお人好しだから、ちよろいと思われたのよ」

「それ、わたしの悪口？」

「なわけないでしょ」

呆あきれ顔の里沙が、お酒を飲みながら手をひらひらと振った。

「そんな二股をかけるような男なんて、いらないでしょ。この先も絶対うまくはいかないし。早く忘れるのが一番よ」

「それはわかってるわよー。でもさー、昨日まで普通につきあっているとってたのよ。普通に好きだったんだもん」

目の奥からわいてきた涙が、鼻をつまらせる。ずびずびと鼻をすすり、目にたまった涙をおしぼりで押さえた。

「まあねー。いきなりは無理だと思っけどさー」

ほれ、と里沙に渡されたティッシュで鼻をかむ。

「だいたい森なんて、なんの特徴もない男じゃん」

「そうかな？」

「そうよ。見かけだってまあ普通と言えば普通だし、いまいち空気も読めなさそうだし。仕事ができるとか言ってたけど、だいたいあいつの仕事、ほとんど史香が手伝ってたじゃない」

「……まあ」

「女に手伝わせるなんて、ろくなヤツじゃないわよ。別れて正解よ、あんな男」
どん、とビールジョッキをテーブルに置いた里沙が、断言した。

「そうよね、二股かけちゃうような男だし」

鼻をすすりながらぼつつと言うと、里沙が頷く。

「そうよ、そんなにイケメンでもないくせに」

「なんか偉そうだし」

「自意識過剰なのよ」

「謝りもしなかったし」

「自分が世界で一番正しいと思ってるイタイ男よ」

次々と森さんの悪口がでてくる。はたから見ればかなりみっともない光景かも知れない。けれどわたしは、少しずつ気持ち昇華しょうかされていくのを感じていた。

終電間際まぎわまで森さんの悪口を言い、二人ともふらふらになって帰宅した。

翌朝は少し二日酔い気味だったけれど、気持ちはすっきりしている。

ただ、なんでそんな男とつきあっていたのかと、違う意味で自己嫌悪おんがひに陥るはめにはなつたけれど。

その後、森さんの悪行が続々と明らかになっていった。それにつれて、わたしのなかで怒りの配

分の方が多くなる。

「やっぱり毎日話しかけてアピールしなきゃ」

「クリスマスデートは、クルージングダイナーさ」

「正月の初詣はつしげも、夜中から一緒に行ったんだ。年越しは一緒に過ごさないと」

連日続く、森さんののろけ話。普段は他人の色恋に興味なさそうな研究員たちが、まるで勇者を称たえる村人のごとく、森さんの話に耳を傾けていた。

……ほほう。二人で初詣はつしげに行ったんだ。わたしには実家に帰省するって言ってたくせに。よくもまあ、そんなことをわたしの前で楽しそうに語れるものだ。もしかしてあの人のなかで、わたしの記憶が削除されたんだろうか。なかったことにされるのはかなりショックだ。けれど、これはわざと聞かせている印象もある。

自分から振った女をさらに傷つけようとすることになんの意味があるのか、さっぱりわからない。唯一の救いと言えるのは、お相手の由奈ちゃんに全然会わないことだ。タイピングがいいのか悪いのか、彼女は体調不良が続いているらしい。そのため、ほとんど出社していないようだ。

「由奈はすぐく俺に気を使ってくれるんだ。料理も上手だし、俺の部屋もきれいに掃除してくれてものすごく女の子らしいんだ。やっぱり女の子はかわいくなくっちゃ」

ふいに聞こえてきた森さんのやけに大きな声に、頭をガツンと殴られたような衝撃を受けた。

わたしは女の子らしいところなんてほとんどない。料理だって自分の分しか作らない。森さんの部屋を掃除したこともないし、それどころか、自分の部屋だって適当だ。昔から勉強ばかりで、

おしやれにも興味がなかった。ファッション誌を読むくらいなら、元素辞典を読んだ方が楽しい。森さんとつきあっているけど、女らしい気遣いもしたことがない。

ないない尽くしの女だから、森さんは浮気したんだろうか。そんなだから、ただでさえない男運が、さらに悪くなるんだろうか。

今のセリフを、森さんはあえてわたしに向かって言った気がする。

「ああ凹む。本当に凹むわー」

思わず声にでてしまった。油断すると泣きそうになるのをこらえながら、ひたすら試験管を見つめる。何度も瞬きをしたら、またコンタクトがずれたような気がした。

森さんに勧められたコンタクト。自分の目に合わないのを、ずっと我慢して使い続けてきた。それは、森さんによく思われたかったからだ。つまり、わたしだって、それなりに気を使ってきたことになる。

でもそれだけじゃ足りなかった。

どうすればこんな結果にならずにすんだのか——。いまさら考えても仕方がないとわかつてはいられないけど、考えてしまう。

瞬きをして涙を払い、ひたすら実験を続けた。実験は白か黒かどちらかにしかならないから、迷うことがない。どんなに感情に振り回されても、結果は明白だ。

——日々そんなことを考えながら仕事をしていたら、作業スピードが格段に上がった。毎日終業のころにはぐったり疲れるけれど、実験中は余計なことを考えずにすむし、森さんののろけ話も聞

こえなくなるからちよいどいい。

そんな風に日々を過ごし、季節は春を迎えた。森さんの話もとくに沈静化したころ、わたしは急遽所長に呼ばれた。

「開発チームが専属の研究員をほしがっている。最近頑張ってるし、池澤さんやってみない？」

「は、はい！」

「作業が一番奥の部屋を使って。専用にするから。当然ながら開発中のデータは門外不出だから、その点は気をつけてね」

「はい」

こういうのを怪我の功名とでもいうのだろうか。

うちの会社内で、商品開発部門は花形だ。新商品の開発に携われるその部署は、みんなの憧れになっている。お菓子が好きでこの会社に入った人が多いのだから、当然かもしれない。自分の作ったお菓子がコンビニやスーパーに並ぶ日を夢みている社員は、結構いるのだ。ただ、仕事は大変で、いつも他社と競争している。いかに早く魅力的な新商品を開発するか、それがメーカーとして大切だからだ。わたしはというと、今まで特に強く、商品開発に関わりたかったことはなかった。けれど、仕事を認めてもらえたと思うと素直にうれしい。そのうえで参加できるのなら、こんなに喜ばしいことはない。

恋愛はダメだったけれど、仕事の運は悪くない。そう考えれば、気持ちも向上する。

そうだ。もう恋愛に現を抜かすことなんてやめて、仕事一筋に生きよう。幸いなことに、チャン

又は目の前にある。

突然の打診に、小躍りしたい気分になった。上機嫌で自分のデスクに戻ると、なぜかそこに冷たい目をした森さんがいた。

「ずいぶん楽しそうだな」

声もやけにそっけない。ほんの数か月前まで普通につきあっていた人のはずなのに、なんだか変な感じだ。

「意外と平気なんだな」

森さんがぼつりとつぶやいた。

「へ？」

「もつとショックを受けてるかと思ってたよ。その程度なんだ、俺への気持ちなんて」

「は？」

「所長もなにをを考えて開発の仕事を回したんだか」

森さんはそう言うと、ふいと顔を背けて歩み去った。

なにそれ。わたしにもつと傷つけてこと？ 泣き叫んで縋りつけとでも？

なんだかものすごく腹が立ってきた。

自分で勝手に浮気して去って行ったくせに、なんて勝手な男なんだろう。でもって、わたしがどんな仕事をしようが関係ないじゃない。

こんなろくでもない男に振られて、散々泣いた自分が馬鹿みたいに思えた。どう考えても、別れ

て正解だ。

突然の失恋にずっととうじうじしていたけれど、今ようやく吹っ切れた気がした。

3

最悪の別れから早三か月、森さんは相変わらず嫌な態度をとったり、彼女とののろけ話を聞こえよがしに大声で言ったりするけれど、吹っ切れたわたしにとっては、もうなんの影響もなかった。

機密性の高い開発部門の仕事について以来、わたしは一人で、終日専用の研究室にこもっている。もう恋愛に現を抜かすこともやめて、仕事一筋と決めていた。そんなわたしにとって、今回の仕事は忙しいけれどかなりやりがいがある。

「池澤さん、今度セミナーがあるんだけど参加してみない？」

わたしがこもっている研究室まで来て、わざわざ声をかけてくれたのは、今回の開発チームのチーフ、中島さんだった。中島さんは三十代後半で、サバサバした性格の快活な女性だ。

「セミナーですか？」

「うん。食品衛生に関するやつ。興味あるでしょ？ 同業者がたくさん集まるのよ。ホテルでやるんだけど、料理がおいしいからそれ目当てで来る人も多いの。それに、今回は西城の頭脳も参加するらしい」

「西城の頭脳？」

聞き慣れない言葉に首を傾げると、中島さんが「知らない？」と笑った。

「西城食品の天才開発者よ。ほら、あの空気みたいに軽いのに味が濃厚なチョコレートとか、食感がパリッモチツてなつてて業界に革命をおこしたポテトチップスとか、あるでしょ？ それは全部、彼が開発したのよ。ほかにも今までに相当な数のヒット商品を生みだして、製法技術の特許も取ってるの。だから別名、西城の頭脳」

「へえー」

西城食品は、業界最大手の企業だ。これまで数々の人気商品を発売している。

頭脳だなんて、変なあだ名。もしかして漫画にでてきそうな、ビン底メガネのマッドサイエンティストみたいな人なのかもしれない。そんな姿を想像して、思わず笑ってしまった。

「そういうの初めてなので、ぜひ行ってみたいです」

「じゃあ名簿に載せとくね。次の金曜日の夕方にみんな揃って行くから」

「はい、よろしく願います」

研究室の出口まで中島さんを見送る。視線の先に、森さんが映った。わたしを睨むように見ている。目が合うと、ふいと視線をそらされた。

なによ、その態度。

もう吹っ切れたとはいえ、気分がいいものではない。

どうやら彼は、わたしが開発の仕事をしているのが相当気に入らないらしい。けれど、そんなの

知ったことじゃない。

「まったく。可愛くて若い女の子と結婚して、子どもも生まれるって状況のくせに。もうわたしのことなんてほっといてくれたらいいのに」

ムカムカした気分で行研究室に戻り、読みかけの資料に目を向けた。仕事よ仕事。もう二度と男に振り回されたりするもんか。

セミナー当日までは、ひたすら研究に没頭した。所長からはえらく感心されて褒められたけれど、森さんは相変わらず不愉快な態度のままだ。

そして迎えたセミナーの日。約束の時間に合うよう仕事を終わらせ、ビジネス用のスーツ姿になった。仕事中は普段着に白衣をはおることがほとんどなので、スーツは久しぶりだ。

トイレでお化粧を整え、瞬きをしてコンタクトレンズがちゃんとはまっているか確認する。最近仕事で忙しいせい、目の疲れが半端ない。夕方近くにはいつも目がしばしばするのだ。

もうコンタクトを続ける必要はないからメガネに戻してもいいのだけれど、それはなんだか負けた気がする。

「だってメガネ姿を見られたくないもん。森さんにも、あの彼女にも」

そんなことを口にしたしてしまっなんて、もしかしてまだちゃんと吹っ切れていないということなんだろうか。

気を取り直して鏡に向き直り、肩まで伸びた髪をぎゅっと結び直す。小さな鏡に何とか全身を

映して、おかしなところがいかチェックした。

セミナーなんてものに行くのも初めてだし、同業他社が集まる場所も初めてだ。中島さんに普通のスーツでいいと聞いていたので、わたしも着慣れないスーツを頑張って着ているのだ。この格好がおかしくないか、何度も鏡を見てしまう。

「大丈夫だよね」

研究室に戻り、迎えに来てくれた中島さんとともにロビーに向かう。そこにはすでに十名程が集まっていた。

「みんな行かれるんですか？」

「そうよ。あとは部長クラスも何人か行くみたいだけど、あつちは車よ」

中島さんがふんと鼻を鳴らし、わたしたちは電車だからね、とつけ加えた。

全員で駅に向かい、電車に乗って移動した。目的地は、湾岸近くの有名ホテルにある広いホール。椅子がずらりと並んだ会場には、すでに大勢の人が集まっていた。割り当てられた席に座ってしばらくすると、壇上に有名大学の有名教授という人が現れた。セミナー開始だ。

教授の話は、一時間ほどで終わった。難しい内容も多かったけれど、おもしろくともためになった。こんな風に業界全体が日々勉強をしているのだと思うと、なかなか興味深い。

「さあ、次は食事の時間よ」

中島さんに促されまわりを見ると、みんなが移動を始めている。食事会場はホール隣の、同じくらしいの広さの部屋だ。ビュッフェ形式のようで、壁際と部屋の真ん中辺りにずらりと料理が並んで

いる。

先に乾杯があるらしく、色んな種類の飲み物のグラスを持ったウェイターさんがたくさんいた。

「池澤さんは飲めるの？」

いち早くワイングラスを取った中島さんが言った。

「とりあえず、今日はお茶にしときます」

そう答え、ウーロン茶の入ったグラスをもらった。初めての場所で、酔って失敗はしたくない。ほどなくして、マイクの音とともに、壇上に司会者が現れた。

「みなさまお待ちいたしました。それでは乾杯の挨拶を西城食品の……」

そこで言葉が途切れた。ざわめきと少しの笑い声が前の方から聞こえる。どうしたんだろうとつま先立ちになると、苦笑いを浮かべた司会の人が見えた。

「ええと、では教授、お願いします」

促されて、先ほど講演をした教授が乾杯の音頭を取った。大きな声が響き、拍手が起こる。

「混む前に行きましょう」

慣れた様子の中島さんに誘われ、みんなで早速料理を取りに行った。とても豪華でおいしそうだ。

「すごいですね」

「これで無料だなんて、さすが西城は太っ腹ね」

「主催は西城食品なんですか？」

「そうよ。共有できることはみんなて共有しましよって。最大手ならではの余裕よね」

中島さんの言葉に頷きながらお皿一杯に料理を盛って、元の場所へ戻った。

わいわいと食べたり話したりしていると、みんなの顔見知りらしい他社の開発や営業の人らが代わる代わる加わってくる。わたしは人見知りか激しいわけではないけれど、普段ほぼ一人でいるので、こんな風は大勢と会話をしながら食事をするのはなかなか難しかった。共通の話題には相槌を打つものの、なんとなく時間を持て余してしまう。

「お料理見えますね」

中島さんに告げ、その場を離れた。ホッと息を吐き、デザートでも探そうかと会場をきよるきよる見渡す。少し離れた場所に、人だかりができてるのが見えた。そこに料理はないので、有名な人でもいるのかもしれない。

そう言えば、西城の頭脳が来ているんだっけ。だったらその人かもしれない。そんなことを考えながら歩いていると、ポンと肩を叩かれた。

「よお、奇遇だな」

「俊くん？」

振り返って驚いたわたしのそばに、ニヤニヤと笑う男性がいた。彼は山本俊くん。里沙の彼氏で、わたしとも長年の友人だ。わたしたちより三つ年上だけど、気さくで楽しい人である。

「なんでいるの？」

「そりゃこっちのセリフだ」

「あ、そうか」

俊くんは、大手外食チェーンで営業マンをしている。普段引きこもって仕事をしているわたしよりも、断然業界に顔が広い。この場にいるのも当然だ。

「今わたし、開発の仕事を手伝って、その関係で来たのよ」

俊くんが納得したように頷いた。そして――

「思ったより元気そうじゃん」

続いた言葉に、思わず苦笑する。彼はわたしの失恋ネタのほぼすべてを知っているのだ。

「まあ、ね。仕事も忙しくなってきたし、いつまでも落ち込んでられないわ」

森さんの最低ぶりをここで改めて語ろうかと一瞬思ったけれど、自分へのダメージが大きそうなのでやめておいた。

「里沙はまだ心配してるから、また連絡してやってくれよ」

「そうね。最近ずっと残業で時間とれなかったから、今日帰ったら連絡するよ」

「ぜひそうしてくれ」

じゃあねと言って俊くんと別れ、改めてデザートを取りに向かった。お皿にケーキやフルーツ、生クリームをたっぷり盛りと盛る。

「おい、藤尾！」

みんなの所に戻ろうと振り返った瞬間、声とともに目の前に急に人が現れた。

「きやつ」

ぶつかりそうになり、とっさにお皿をひっこめる。そのお皿が胸元に当たり、中身が全部飛び

散った。大半はわたしの顔と服に、そして、一部が目の前の人靴に。

「うわ、なにやってんだ！」

怒りを含んだ男性の声に、慌てて顔を上げる。

「す、すみません」

目の前には、仕立てのよさそうなスーツを着た男性がいた。その男性は明らかに怒っている。

あなたが急にできたからじゃない……という言葉を呑み込み、とりあえず顔に飛び散ったクリームを取ろうとした。目の近くを指で擦る。

「あっ」

——なんてこと。擦った拍子に、コンタクトがぼろりと落ちてしまった。視界が突如ぼやける。

わたたしているうちに、飛び散ったクリームがもう片方の目に垂れてきた。その目はもう開くこともできない。

とっさに床に手をつき、裸眼でぼやける視界のなかコンタクトレンズを探す。

「おいおい、なんだよ」

目の前の男から呆れた声が聞こえたけれど、それどころではない。パニック状態とはこのことを言うのだろうか。まわりからざわめきが聞こえる。みんなが見ているのだろう。そんななかでの状況に、恥ずかしさと動揺で頭が真っ白になった。

「大丈夫ですか？」

そのとき突然、声が聞こえた。低く掠れてはいるけれど、さっきの男とは違う優しい声だ。

「コ、コンタクトを落としてしまって」

手探りで床を触るわたしの手に、大きな手が重なった。その手がとても熱くて、ドキツとして動きが止まる。

「落ち着いて。レンズはこれかな」

掠れ声の男性はそう言って、わたしの掌に小さなレンズを載せてくれた。

「あ、ありがとうございます」

「早く顔を洗って着替えた方がいいよ」

その男性に手を取られ、立ちあがる。小さな咳がわたしの頭の上から聞こえた。彼はとても背が高いようだ。

「でも、なにも持ってないんです」

俯いたままこたえる。顔も洗いたいし着替えたいけれど、タオルも着替えもない。まあそれも当然だけれど。

「大丈夫」

男性は、わたしの肩をぼんと撫でるように叩いた。見ず知らずの人なのに、その行為と言葉にんだか安心する。

「おい、おれも散々だぞ」

近くから聞こえてきた怒りを含んだ声は、さっきぶつかった男だ。

「お前が悪い」

優しい方の彼がそっけなく答える。ほどなくして誰かが近くに来た気配を感じた。

「この方をお願いします」

彼がそう言いながら、わたしの手をそっと導く。

「かしこまりました」

応えた声は女性だ。ぼやける視界のなかでも、どうやらホテルのスタッフのようだとわかった。

「どうぞ」

ふかふかのタオルを渡され、それでクリームに覆われた目を押さえた。

「あの、ありがとうございます」

彼がいるであろう方向に顔を向け、頭を下げる。

「どういたしました」

酷く掠れた声に、咳が続く。どうやら、体調が悪そうだ。

「あなたも、どうぞお大事に」

「……ありがとう」

スタッフに手を引かれ、廊下にてた。ちゃんとは見えなかったけれど、かなり大勢の人の気配を感じたので、まわりにはたくさん人がいたのだろう。

スタッフに連れて行かれたのは、ホテルの一室だった。まっすぐ浴室に案内される。

「クレンジングや洗顔フォームなども揃っております。ご自由にお使い下さい。まずはこのローブに着替えていただけますか。その間にお洋服をクリーニングいたします」

「あ、あの。クロークに預けている鞆かばんに、お化粧ポーチとコンタクトのケースが入ってるんです。それを持ってきてもらうことはできますか？」

「かしこまりました。すぐにお持ちします」

クロークの番号札と、クリームにまみれたスーツをスタッフに渡す。

一人になり、もう片方のコンタクトを外した。本当に腹立たしい。ぶつかってきたあの男の人も悪かったけど、このハードレンズも悪い。

「もうやめる。絶対やめる！」

外したコンタクトを洗面台に乱暴に置いた。もう落としても流されても、絶対に探さない。

コンタクトなんて、さっさとやめればよかったんだ。変な意地を張ったせいで、どえらいめにあってしまった。

備えつけのクレンジングと洗顔フォームを使って顔を洗う。さすがは高級ホテル。アメニティも高価なのか、泡立ちがとつてもクリーミーだ。

そんなことを考えながら顔を洗い、ふかふかのタオルで拭いた。顔を上げると、鏡のなかにはどすっぴんの自分の顔。とはいえ、視力がよくないので、ぼやけていてよくわからない。

まあ汚れてなければいいでしょ。

ブラシで髪を整えてから洗面所をでると、ちょうどさっきの女性スタッフが戻ってきたところだった。

「お待たせしました、お荷物です。スーツの方はあと三十分くらいお待ちいただけますでしょうか」

「ありがとうございます。お手数をおかけしてすみません」

「いいえ。お連れの方々にもお伝えしておりますので、どうぞごゆっくり」

「あつ。重ね重ねありがとうございます」

みんなのことをすっかり忘れていた。というか、社会的に大丈夫だっただろうか。みんなにも恥ずかしい思いをさせてしまったのなら申し訳ない。

持ってきてもらった鞆かばんからポーチをだし、備えつけのアメニティを駆使くしして、なんとか化粧をした。ぼやけていてよく見えないので、ギリギリまで鏡に近づいて確認する。まあいいだろう、と思えるくらいにはなったはずだ。

洗面台に置いていたコンタクトをぼいぼいとケースに入れた。もう使わないから、洗う必要すらない。

荷物を整え、手持無沙汰になったので、窓に近づいた。カーテンをそっと開けると、そこには驚くほどきれいな夜景が広がっていた。

「うわぁ」

思わず声が出る。もしかしてここは、かなりいい部屋なのだろうか。よくよく見れば、わたしがいるこの部屋にはベッドがない。ということは、ベッドルームが別にあるのだろう。一般的なシングルの部屋しか知らないから、探検したいと思ったけれど、状況が状況だけにその気持ちを抑える。それにしても、こんなに至れり尽くせりしてもらっていいのだろうか。いや、さすがにクリーニングは有料だろう。

お財布にいくら入っているのか、確認しておかなければ。

現実気づいて、上がったテンションが一気に下がる。逆に心臓がバクバクし始めた。そのとき、女性スタッフが戻ってきた。

「お待ちせしました」

「あ、ありがとうございます」

きちんとハンガーにさげられた、ビニールのかかったスーツを受け取る。

「他にご入用のものはありますか？」

「い、いえ。もう大丈夫です。それで、あの……」

「なんでしょうか」

「えっと、クリーニング代とかこのお部屋の料金とか、どうお支払いすれば」

「とんでもないです」

女性スタッフは驚いたように目を見開いた。

「料金はただけません」

「いいんですか？」

「もちろんでございます」

笑顔のスタッフに、ホッと胸を撫なでおろす。

「外でお待ちしておりますので、お着替えが終わりましたらお声をかけて下さい。会場までお送りいたします」

「ありがとうございます」

あれからもう一時間近く経^たっている。みんなはまだいるのだろうか。会ったら謝らないと。それから、あるとき助けてくれた男性にもお礼を言いたい。

慌てて着替え、最後にもう一度鏡を見ておかしなところがないか確認した。裸眼ではつきりとは見えないけれど、たぶん大丈夫だろう。荷物を持って部屋のドアを開け、待っていてくれたスタッフとともに会場に戻る。会場にはまだまだ人がたくさんいて、歓談の最中だった。

会場に足を踏み入れると、わたしに気づいたらしく、中島さんたちが駆け寄ってきた。

「池澤さん、大丈夫？」

「ごめんなさい、ご迷惑をおかけしました」

「いいのよ。事情が事情だもん」

「知ってるんですか？」

「騒ぎのあと、西城の関係者が謝罪と説明に来てくれたのよ」

「あの人、西城食品の人だったんですか？」

「そうよ」

ああ、だからか。わたしを助けてくれた人も西城の人なんだ。主催者側だったから、ホテルの対応も早くできたのだろう。

なんだか色々納得してしまった。

そのあと、食べそこなっていたデザートを改めて堪能^{たんのう}し、会場をあとにした。最寄り駅でみんな

と別れ、週末の混んだ電車に乗り込む。

窓ガラスに映った自分の顔は、ぼんやりとしていて目や鼻でさえクリアに判別できない。メガネがないとなにも見えないのだ。

「あ」

忘れてた。さっき助けてくれた人にお礼を言おうと思っていたのに。会社のみんなに会って安心した途端、すっかり頭から抜けてしまった。

わたしが他社の人と会うことはほとんどないので、もうお礼を言う機会はないかもしれない。顔も覚えていないし、その可能性は高い。どこかで偶然見かけても、わからないんだから。

—— 本当ありがとうございます。

心のなかでお礼を言う。そして、二度とコンタクトはしないと改めて決意した。

セミナーでの失態を、わたしは週が明けても少し引きずっていた。けれど、決意した通り、コンタクトレンズはさっさと捨てた。久しぶりにメガネをかけての会社だ。セミナーの件もメガネの件も、職場の誰からもなにも言われなかった。ハッキリ言って肩透かしだけど、まあよかったのだろう。注目されるのは慣れていないし。メガネについても、ほんの三か月前まではかけていたのだから

ら、それほど驚くに値しないのかもしれない。

結局、いろんなことを気にしていたのは自分だけだったのだと、改めてつきつけられた結果になった。一人密かに凹む。けれど、目に違和感がないことは快適だった。おかげで、仕事をサクサクとこなしている。

里沙から連絡があったのは、それからしばらく経った土曜日のことだった。

普段の寝不足を解消しようと思覚ましもかけず寝ていたわたしは、スマホの着信音に起こされた。

「はい？」

『まだ寝てるの？ もう十時よ』

「今日は土曜日よ。いつまでだつて寝るわよ。——で、どうしたの？」

『ランチ行こうよ』

「ランチ？」

『そう。俊がね、おいしいお店を見つけたんだつて』

「それつてデートでしょ？ 二人で行きなよ」

『デートじゃないわよ。いいじゃない、行こうよ。俊がご馳走してくれるつて』

「まじで？ じゃあ行く」

『それじゃ待ちあわせしましょ』

里沙から聞いた場所を復唱して、電話を切った。そしてえいと起き上がる。

窓を開けると、外は初夏の陽気だった。パジャマのまま階下に降りる。誰の気配もしないから、

両親は仕事にでもでているのだろう。根っからの仕事人間の二人は、休日出勤も苦にならないらしい。

顔を洗って歯を磨き、もつれた髪の毛を梳く。あくびをしながらまた部屋に戻り、タンスから洋服を探した。といっても、探したところでたいした服はでてこない。いつもの通勤服と同じような服をだし、のろのろと着替える。お化粧をし、肩よりも長い髪をひとつに結ぼうとしてやめた。

会社に行くわけじゃないんだし、たまにはいいだろう。

滅多に使わないヘアアイロンで髪をゆるく巻き、いつもと少しだけ印象を変える。それでも、メガネをかけてしまえば、結局いつも通りの自分だ。

「まあいいでしょ」

シオルダーバッグにお財布とスマホ、ハンカチとお化粧ポーチを入れる。給料日前でお財布の中身がちよっと寂しいけれど、おごりなら関係ないか。

家までで、駅までぶらぶらと歩く。お日様の光と時々吹いてくる風が気持ちいい。だんだんと強くなってくる日差しに、夏を感じる。

考えてみれば、二月に失恋してから、休日に出歩くこともほとんどなくなっていた。ひたすら仕事に没頭してきたので、その間は季節感など皆無だったのだ。

久しぶりの感覚にいい気分になりながら、電車で待ち合わせの場所に向かった。

「史香！」

改札を抜けたところで声が聞こえた。顔を上げて見回すと、少し離れた場所で里沙が手を振っている。スポーティなパンツスタイルが、背の高い彼女によく似合っている。

「ごめん、待った？」

「わたしも今来たところよ。俊は先に行ってるって」

里沙と並んで歩きだす。

「あんなコンタクトどうしたの？」

「やめたの。すぐ外れちゃうし、全然慣れないから」

前を向いたまま答えると、里沙がふーんと鼻をならした。ここでやめた経緯を馬鹿正直に説明したら、呆れられるのは目に見えている。これ以上のダメージは負いたくないので、それ以上は黙っていた。

「そっちの方が似合ってるわよ」

里沙がわたしのメガネのふちを指でそととつついた。

「わたしも、こっちの方が違和感がないわ」

ふふふと笑い返すと、里沙もつられたように笑った。

俊くんが待っているというレストランは、駅から五分ほど歩いた場所にあった。見るからにおしゃれなお店で、入り口には列ができています。日当たりのいいオープンテラスは、すでに満席だ。

「混んでるのね。大丈夫なの？」

「予約してるから」

入り口で里沙が俊くんの名前を告げると、すぐに案内された。

「わざわざランチを予約って、どうしちゃったの？」

普段の俊くんからは想像ができない対応に、疑問を抱く。その質問に里沙は返事をしなかった。けれど——答えはすぐにわかってしまった。

俊くんは、店内の日当たりのいいテーブル席に座っていた。その隣には、見知らぬ男の人。その人は、まっすぐにわたしを見ていた。多分、わたしが彼の存在に気づく前から。

少しずつ近づいたときに、その人が驚くほど整った顔をしているのがわかった。はつきりとした目鼻立ちは、どこかの俳優さんかと見紛うばかり。わたしの心臓がドキドキ始める。

わたしたちがテーブルにたどり着く前に、その人が迎えるように立ち上がった。つられるように動きだした俊くんと比べ、その彼はとても背が高い。

「お待たせ」

里沙が言い、ちらりとその人に視線を走らせた。里沙の視線に気づいたのか、俊くんが言う。

「こっちは、先輩の黒川さん。この前偶然再会して、連絡を取り合うようになったんだ。で、今日も誘ってみた」

「はじめまして。黒川悠生です。今日はお邪魔してすみません」

その人、黒川さんがわたしたちに少し頭を下げた。低く透き通るような声が印象的だ。

「こちらこそはじめまして。わたしは竹本里沙。俊とおつきあいします」

「あっ。池澤史香です。ふ、二人の友だちです」

慌てて答えると、黒川さんがふっと笑った。

黒川さんは俊くんの二つ上だそう。俊くんが三十歳だから、現在三十二歳。わたしよりも五歳

年上ということか。

アーモンド型の目は、きれいな二重^{ふたえ}。男の人にしては長めのまつげに、つい目がいつてしまう。顔立ちは完璧だ。黒い髪はおしゃれにスタイリングされていて、シャツとズボンというカジュアルな格好をしている。シンプルな服装だけど、モデルだと言われても納得してしまうほどのハイスベックな容姿だ。ドキドキして、うまく笑顔を返せない。

「とりあえず座れよ。腹減ったし」

妙な緊張感を打破するかのように、俊くんが呑気^{のんき}に言った。

四人がけの丸いテーブルに、すでに俊くんと黒川さんが隣同士に座っていたので、必然的にわたしが黒川さんの隣に座ることになった。わたしが座ろうとした瞬間、黒川さんがさりげなく椅子を引いてくれる。

「あ、ありがとうございます」

「いえ」

距離が近い。手を伸ばせば届く場所に、黒川さんのきれいな顔がある。必要以上にドキドキしていることを悟られないように、膝の上でぎゅっと手を握った。

「黒川さんって紳士なんですね。俊も見習いなよ」

「無理、俺のキャラじゃない」

里沙が羨ましげに言うと、俊くんがあっさりと答えた。そして、店員さんに合図をするように手を振る。

ランチコースは決まっているらしく、個別に料理を注文することはなかった。食後の飲み物だけを各自で頼む。

料理がくるまで、いつもなら三人でくだらない話や、すでにわたしの持ちネタのようになっていた元カチたちとの失恋話をするのだけれど、さすがに今日はそうもいかない。

自分から話しかけた方がいいのだろうと思うけれど、わたしのコミュニケーション能力はそれほど高くはない。しかも相手は超がつくほどのイケメンだ。店にいる女性たちが、ちらちらと視線を送っていることがわかる。

「黒川さんって、俊といつからの知り合いなんですか？」

わたしよりも数倍気の利く里沙が、黒川さんに話しかけた。ナイス、里沙。

「大学からです。同じ学部で」

黒川さんが言いながら俊くんに視線を移すと、俊くんがうんうんと頷いた。

「すぐモテるでしょ？」

「そんなことないですよ」

里沙の言葉に、黒川さんが困ったような笑顔をわたしに向けた。とんでもなく完璧な容姿^{ようぼう}で一見クールにも見えるけれど、わりと気さくな人のようだ。

なんだかホツとしたとき、最初の料理が運ばれてきた。大きなお皿に盛りつけられた前菜は、色どりもとてもいい。

「わ、おいしそう」